

視点1

日々、共にあるものごと

伊東良子

(保育士)

私が勤める川和保育園は、園庭保育を中心に、「子どもたちが意欲的に遊び込める保育環境」というものを日々考えて保育しています。子どもが一日の大半を過ごす保育園の役割は、とても大きく、責任あるものと思っています。

川和保育園の園庭は、土や水に恵まれた環境にあり、園長が四十年かけて植え続けてきた木々に見守られ、風や光を浴びながら、〇歳児から五歳児までが共に過ごしています。生い茂った木々は季節ごとに見せる姿を変え、私たちの目と心を奪います。夏には大きな木

陰を作り、心地良さを教えてくれます。秋には舞い落ちる葉に手をかざし、踏みならし、焼き芋を楽しみます。すっかり葉が落ちた冬には、毎日たき火が登場し、子どもたちの心と身体を暖めてくれます。そして春の訪れ。木々の芽吹きは新年度の始まりを告げ、ワクワクさせてくれます。

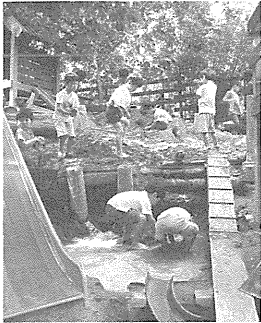
「自然体験」って何だ？ と問われた時、子どもたちの姿と共にこれら四季折々の光景が浮かび、それは『日々共にあるもの』ではないかと感じました。

伊東良子（いとうりょうこ）
川和保育園保育士。

「自分で考え 自分で遊ぶ 子どもたち」

これは私たちが大切にしていることです。幼児クラスだけでなく、乳児クラスも含むすべての子どもたちに与えられている自由です。

私たちは遊びの中で「動」と「静」というものを大切にしています。一見すると、「動」
「園庭」、「静」
「室内と考えられがちですが、園庭においても室内においても「動」と「静」は両立できるものです。園庭でダイナミックに身体を使って遊ぶことはもちろんですが、園庭であつても「静」の時をゆつくり持てる空間が至る所にあるのです。これは子ども自身がつくり出すものです。
子どもは、
どんなに小さな子であつても、自分のま



▲園庭での遊び

なざしというものを持っています。そのまなざしの先にあるもの——その中でたくさん「発見」と「不思議」に出会い、そして、その出会いがその瞬間その瞬間、さらにそれがその子どもたちの数だけあるとしたら、何という豊かな世界で私たちは生きているのだろうと思えてなりません。「発見」や「不思議」に出会った子どもたちは、自分が守られている温かい腕から自ら離れ、自ら這い、土を踏みしめ、じつと見つめ、手を伸ばし、何かを確かめていこうとします。自分の「まなざしの先へ」歩んでいこうとする背中、どんなに小さくとも一人の人間としての存在の大きさを見たと知らしめてくれます。こんな場面を見た時に、いつも思い出す文章があります。

「多くの親は、熱心で繊細な子どもの好奇心にふれるたびに、さまざまなきものたちが住む複雑な自然界について自分がなにも知ら

ないことに気がつき、しばしば、どうしてよいかわからなくなります。そして、

『自分の子どもに自然のことを教えるなんて、どうしたらできるといふのでしょうか。わたしは、そこにいる鳥の名前すら知らないのに！』と嘆きの声をあげるのです。

わたしは、子どもにとっても、どのようにして子どもを教育すべきか頭をなやませている親にとっても、『知る』ことは『感じる』ことの半分も重要ではないと固く信じています。

子どもたちがであう事実のひとつひとつが、やがて知識や知恵を生みだす種子だとしたら、さまざまな情緒やゆたかな感受性は、この種子をはぐくむ肥沃な土壌です。幼い子ども時代は、この土壌を耕すときです。

美しいものを美しいと感じる感覚、新しいものや未知なものにふれたときの感激、思いやり、隣れみ、賛嘆や愛情などのさまざまな形の感情がひとたびよびさまされると、次はその

の対象となるものについてもつとよく知りたいたいと思うようになります。そのようにして見つけだした知識は、しつかりと身につきます。

消化する能力がまだそなわっていない子どもに、事実をうのみにさせるよりも、むしろ子どもが知りたがるような道を切りひらいてやることのほうがどんなにたいせつであるかわかりません。」(レイチエル・カーソン著『センス・オブ・ワンダー』新潮社一九九六年)

このレイチエル・カーソンの言葉は、子どもの本質的欲求とされる学びの場が「特別なもの」としてではなく、「常に共にあるもの」としてどれだけ重要であるかということ、私たちに教えてくれています。

園外保育

私たちはよく園外保育にも出かけます。幼児クラスは週に一回くらい、園バスで二十分



▲夏の三ツ峠。下山より雨の三ツ峠に

ほどの「三保市民の森」や「こどもの国」へ行きます。初夏から夏の終わりにかけては三浦半島にある「三戸浜」へ海遊びに行きます。ライフジャケットを着て沖まで泳いだり、波乗り、カヌー、岩からの飛び込みをしたり、網を持って磯遊びや、貝拾いをしたり……。海は、穏やかな澄んだ顔の日もあれば、波の高い荒々しい顔の時もあります。子どもたちは大きな自然を前に、じっとその姿を見つめます。そんな時の子どもたちは、筆舌に付き難い、厳しくも素晴らしい表情をします。

年長になると、一八五〇メートルの「三ツ峠」に、初夏、秋、雪の季節に登ります。一見「動」のような活動ですが、「静」だと私は思っています。子どもた

ちは、到底かなうことのできない大きな自然の中で、五感を研ぎ澄ませ、日々遊び込むことで作られてきた身体を使いこなし、山の厳しさと、だからこそ感じられる自然の大きな力、本当の優しさを感じていくのだと思います。

「自律」というものは、きちんと自分の目で物事を見られるようにならなければ身に付かないものだと思います。教えるのではなく、それ以前に、子どもが、自身の欲求する経験を十分に行える環境にあること。それには自然は不可欠で、自然と対峙することで、「自分が持つべき距離」も育っていくのだろうと思います。この体験がやがて、何かに思いを寄せる、人間らしい心動く姿になっていくと信じています。



▲夏の三ツ峠で